「咄の会」活動記録

第五期

文責:世話人代表 山田敏之

番外編(16) 寄席巡り - その9

日 時:2017年3月7(火)13:45~16:30

場 所:横浜にぎわい座(桜木町) 出演者:鈴々舎馬桜(トリ)ほか

参加者:10名

懇談会:「キリンシティ CIAL 桜木町」(参加者 6 名)

2月のアンケートではより近い場所での寄席巡りに関心を 持つ方も少なくなかったので、今回は横浜にぎわい座を選び

ました。3月7日は「横浜にぎわい寄席」の楽日で、落語協会、落語芸術協会混在の番組です。





開口一番は桂伸治の弟子の桂伸しんで、前座らしい稚さを残しながらも『だくだく』を好演してくれました。数ある泥棒噺の中でも独特の長閑な味わいがある噺といえます。続いて二ツ目の三遊亭わん丈。新作派の雄三遊亭圓丈の弟子だけに古典の『がまの油』を自在にアレンジし、聴き慣れた噺を新鮮な趣に仕立て直して明るく演じました。ちなみに東大ホームカミングデーでは、よく本物の大道芸人によるがまの油売りの実演が催されます。「御用とお急ぎでない方は良一く見ておいで」ですね。

続いてコンビ結成以来 23 年の夫婦漫才ひでや・やすこ。開いた両手を胸の前で組み合わせてヒラヒラさせる"最高最高!"の看板ポーズとともに、息のあった芸で盛り上げ、中トリの雷蔵につなぎました。雷蔵は『夢金』。スリラーめいた筋書きから、船頭の咄嗟の機転で人助けをする話に転じ、そして最後はいかにも落語らしいサゲに至る良く出来た噺です。サゲ方にもいろいろ芸風があって、中には謝礼の金子を握りしめたら痛かったが、実は夢の中で本物の"金"を握っていたというのもあります。

仲入り後は昨年真打昇進したばかりの可女治改め可風の『雑排』です。駆け出しから大真打まで、それぞれの器量に応じて自在に操れる噺ですが、可風はさすがに現代人らしい感覚でうまくまとめていました。続いてダーク広和が登場。ロープマジック、DVD を用いた謎、番号を記した幾つもの立方体を"タネも仕掛けもない"四角の筒を使って自在に並び替える技、どれをとってもその不思議さにただ唖然とするばかりの見事な腕前でした。騙されて嬉しいのは奇術ばかりでしょう。



トリは馬桜。そういえば馬肉のことをさくらともいうなと変な連想をしながら、名作『井戸の茶碗』を聴きました。正直者の集まりのような登場人物が織り成す上質のファルスは何度聴いても飽きることがありません。馬桜も期待に違わず、年季の入った芸で聴衆をたっぷり魅了してくれました。

終演後の懇談会は6名参加し、桜木町駅ビル CIAL の中にある「キリンシティ」でビールやワインを手に、見てきたばかりの演芸を肴に楽しく歓談しました。

第30回「咄の会」 ―講演―

日 時:2017年2月3日(金) 14:30~16:30

場 所:山ノ内公会堂

講 師:大塚幸雄(東大落語会)

演 題:『よみがえる若き日の立川談志』

参加者: 45名(うち女性13名)

懇談会:「鈴や」(大塚さんを含めて13名参加)



「咄の会」例会もちょうど30回を迎えたので、これまで

熱心に通っていただいた皆様への感謝の気持ちを込めて今回は会費無料としました。そのせいだけではなく、内容も興味を惹くものだったからでしょうが、何と 55 名の申込がありました。当日直前になって風邪を引いた方が続出し、実際の参加者は 45 名と減りましたが、それでも過去最多入場記録です。

講師の大塚さんは昭和 52 年農学部卒で、現在 NHK 出版の取締役をされています。在学時代は落研の部長を務め、社会人となってからも"武闘派"として活躍を続け、同期の仲間たちと横浜にぎわい座を借り切って行う「迷人落伍会」の定連メンバーです。また昨年は東大落語会寄席にも出演されました。今回も最初は落語実演をお願いしたのですが、ご自身が制作を担当され、昨年 11 月に発売され好評を得ている NHK 出版の DVD BOOK『立川談志全集 よみがえる若き日の名人芸』の制作にまつわるお話を伺うことになりました。この全集には談志の最も古い映像である 42 歳の時のものから最晩年の72 歳に至るまで、選りすぐりの名演が収録されています。

大塚さんのお話によれば、談志の生涯をピカソになぞらえたのは山藤章二だそうで、古典的な手法にきっちり徹した若い頃を「青の時代」と呼びます。29歳で名著『現代落語論』を著し、30歳で『笑点』を企画・実現し、39歳で衆議院議員に当選という破格の道を歩んできました。落語を冷静に分析し、「落語は人間の業の肯定だ」という名言を吐く一方、物語を語るだけでなく、自分を語らねば駄目だとして自分に注目を集めるような行動をとったのは、それ迄の噺家には無かったことです。

1985年落語協会を脱退し落語立川流家元を名乗るあたりから「印象派」的になりますが、2001年に最大のライバルであった志ん朝を亡くした後はさらに心境に変化を来し、高座の出来不出来の差も大きくなります、そして「キュビズム」らしい「イリュージョン」へ、さらに「新古典主義」ともいえる「江戸の風」へと移っていきます。「イリュージョン」とは何か訳の分からぬ言葉の応酬の中に落語の本質があるとするもの、「江戸の風」とは落語を聴いていて何とも言えないいい気持ちになるようなことともいえば良いのでしょうか。こうした芸風の変遷に対し、若いころの談志は好きだが晩年の談志は嫌いだという人と、全くその逆の人がいるのも談志の大きな特徴といえるでしょう。

全集に 26 席収録されている中で、この日は 48 歳の『桑名船』と 72 歳の『居残り佐平治』の二席を選んで観せていただきました。前者はまくらの面白さと、談志が自分で『五目講釈』を取り込んだという講談調の活舌の見事さに、後者はまさにイリュージョンの横溢する斬新な至芸に参加者一同すっかり



そのほか制作の苦労話をいろいろ伺いましたが、とても書き切れません。中でも金色に輝く下地に豪華な松を描いたカバーを一つ一つ手作りする作業には驚く他ありませんでした。

恒例の懇談会は大塚さんご夫妻を交えて総勢 13 名、「鈴や」 で落語談義に花を咲かせ、楽しい時を過ごしました。

なおこの日に実施したアンケートの結果を次頁に示します。

付:「咄の会」についてのアンケート(2017年2月3日実施)回答集計結果

当日参加者 45 名中 37 名から回答用紙回収=回収率 82.2% 参加申込欠席舎 15 名中 9 名からメールで回答受信=回収率 60% 合計回収率 76.7%

1) 例会企画について:

- ・ 年間開催回数 (93%) 年6回でよい (2%) 増やして欲しい (2%) 減らしてもよい
- (70%) 今程度でよい (22%) 増やして欲しい (2%) 減らしてもよい 真打出演回数
- ・ 二ツ目出演回数 (78%) 今程度でよい (13%) 増やして欲しい (4%) 減らしてもよい
- (72%) 今程度でよい (4%) 増やして欲しい (17%) 減らしてもよい ・ OB 出演回数
- (80%) 今程度でよい (4%) 増やして欲しい (9%) 減らしてもよい 講演回数
- ・ これまで無かった講談や色物など (43%) 偶には加えて欲しい (30%) 必要ない
- 例会会費 (70%) 今程度でよい (20%) 高くても上質の芸を (0%) 安く気軽に

その他開催日時、会場、案内方法などについてのご意見や、希望する噺家や演目、講演内容など:

- ・開会を30分繰り上げて欲しい。・むかし家今松を招いて欲しい。
- ・ビデオで志ん生を見たい。
- ・今回初参加だが、今後できるだけ参加したい。

2) 懇談会について:

(37%) 今のやり方でよい (35%) 軽く一杯程度で短時間なら参加したい (9%) 参加しない その他のご意見や、新しい懇談会方式の提案など:

- 初参加なのでわからない。
- ・参加実績はないが時には参加したい。
- ・健康上の理由で参加できない。
- 3) 番外編の「寄席巡り」について:
 - (59%) 日程と内容が希望にあえば参加したい (7%) 特に参加したいとは思わない
 - (26%) 都内の寄席に行くのは無理だが、鎌倉近辺の落語会であれば参加するかも知れない
 - (11%) 予約の必要な落語会にまとめて席を確保してもらえると有難い

その他の改善提案や、新しい番外編企画の提案など:

- ・3項の"鎌倉近辺"に横浜を加えてもよい。
- 4) 「咄の会」のホームページについて:
 - ・ 次回予告(偶数月 15 日更新) (43%) 見たことがない (39%) 見ることもある
 - 同上内のニュースや落語会情報 (39%) 見たことがない (35%) 参考にすることもある
 - ・ 活動記録 (偶数月 15 日更新) (**35%**) 見ることもある (**33%**) 見たことがない

その他のご意見や、ホームページに取り入れて欲しい内容など:

- ・これから見るようにする。・ 興味は持っているがまだ見たことがない。
- ・HP があることを知らなかったので見たことはない。
- トップページから「咄の会」のページへのアクセスを分かり易くすべき。
- ※ 当日の会場準備・片付け、受付・会計について、世話役(多田、谷、野口、山田)の手が足りない ときにお手伝いいただけそうな方は、ぜひ山田までお知らせください。
 - 時間が許す限りそうしている。
- ・今後参加する気はある。

お手伝いする。

・淡青会会員以外でもよければお手伝いする。

回答は適宜記入項目や文章を変えているところがあります。

第29回「咄の会」 一落語一

日 時:2016年12月2日(金) 14:30~16:30

場 所:山ノ内公会堂

出演者:柳亭こみち(落語協会二ツ目)

演 目: 『たいこ腹』、『浪曲社長』 『御神酒徳利』

参加者:36名(うち女性7名)

懇談会:「侘助」(こみちさんを含めて10名参加)



少し前までの予報では雨模様だったのに朝から上天気、この

季節にしては暖かい日となりました。お蔭で出足もよく、また会員以外のゲストも多数加わって賑やかな会となりました。こみちさんは早稲田大学卒、柳亭燕路門下の二ツ目ですが、早くから落語通の間で 声価が高く、すでに来年9月下席より真打昇進が決まっているという期待の女性噺家です。

一席目は『たいこ腹』。退屈のあまり鍼を打つことに凝ってしまった金持ちの若旦那、馴染みの幇間一八に百円札と羽織一枚の祝儀と引き換えに鍼を打たせることを承知させた。しかし素人の悲しさ、一八の腹を血だらけにしたまま青くなって逃げ出してしまう。泣きべそをかく一八に待合の女将が「お前もいっぱしの幇間、幾らかにはなったんだろ?」と問うと「いえ、皮が破れてなりませんでした」。幇間(たいこもち)と太鼓、金になると太鼓が鳴るの地口ですが、"ぶっつけ落ち"といえるでしょう。

そのまま続けての二席目は懐かしい『浪曲社長』。予想外の嬉しい驚きでした。今の三遊亭圓歌がまだ歌奴だった頃、『授業中』とともに人気を博した噺で、広沢虎造ばりの名調子が忘れられません。『授業中』は歌奴自作ですが、これは『授業中』の生徒たちが社会人になった情景という思いで永瀧五郎が作ったものだそうです。音曲噺に長じたこみちさんには、浪曲入りの噺もよく似合います。

仲入り後は大ネタ『御神酒徳利』。旅籠の通い番頭で人の好い善六さん、うっかり大失敗をするが易者の娘である女房に入れ知恵され、算盤占いの名人と偽って見事にその場を切り抜けた。しかしそれを聴いた宿泊中の鴻池家支配人から、鴻池善右衛門の娘の病気治療を懇願され、渋々大阪に向かう羽目に陥った。その途中神奈川宿で密書の入った巾着が紛失した事件の犯人捜しを依頼され夜逃げを図るが、犯人がこっそり自首してきて上手く切り抜ける。その時に稲荷の祠を新装するように言ったことが幸いし、そのご利益で鴻池の娘も全快、善六さんは無事江戸に戻るというお目出度い噺です。なかなか難しい噺ですが、こみちさんは見事な話芸で観客を沸かせました。この噺は昭和 38 年に三遊亭圓生が昭和



天皇の前で御前口演したことでも知られています。なお、こみちさんの サゲは圓生の「算盤占いのお蔭で生活が桁違いになった」とは違い、三 代目桂三木助と同じ「稲荷大明神じゃなく、嬶ぁ大明神のお蔭だ」でし た。この方がいいように思います。

こみちさんはさらに続けて「奴さん」の踊りで吾妻流名取の腕前を披露し、観客は思いがけない大サービスに大喜びです。続くトークタイムでは落語界における「ガラスの天井」論をはじめ多くのやりとりを重ね、和やかな雰囲気のうちにお開きとなりました。

「侘助」での懇談会では、狭い場所で文字通り膝突き合せながら、落語 通のゲスト二人も加わって賑やかに話がはずみました。

番外編(15) 東大 HCD 東大落語会寄席

日 時:2016年10月15日 (土) 11:00~17:15

場 所:東大本郷キャンパス 法文一号館二十一番教室

出演者・演目:下図

参加者:5名+ α (自由参加のため正確には不明)

懇談会:なし



恒例のホームカミングデー東大落語会寄席は、鎌倉淡青会に

はお馴染みの藤井隆さん(第6回「咄の会」、2015年新年会出演)が幹事となって運営されています。 今年は出場者が15名を数え、11時から17時過ぎまでたっぷり6時間余の長丁場でした。出場者は一 昨年が13名、昨年が14名と毎年増加し、かつ長老から若手への世代交代が着々と進んでいます。出演 者と演目を下に示しますが、緑色のマークをつけた方々は既に「咄の会」に出演いただいていますし、 青色マークの大塚さんには来年2月の第30回例会に出ていただくようお願いしています。

私は6人目の佐藤さんの途中から入場したのですが、トリの藤井さん(上の写真)に至るまで通して聴き、それぞれ腕に覚えの武闘派の面々の達者な芸を堪能しました。皆さん期待に違わぬ素晴らし高座で、個々に紹介するにはとても紙数が足りません。敢えて一つ挙げれば能美さんの新作落語ですね。この方は毎回新しい自作落語を披露しているのですが、今年はイチロー選手が腕利きの殺し屋に間違えられるという奇想天外な滑稽噺。出てくる野球用語がすべて政治がらみの暗殺者のこととして勘違いされる面白さは絶妙でした。好送球でランナーを刺す(人を刺す)ことに始まり、ヒットを打つ(ピストルを撃つ)、ライト(右翼)、レフト(左翼)、投手(党首)、捕手(保守)など奇妙に符合する言葉が綾なす喜劇は、作者の豊かな遊び心が生んだ傑作といえます。何となく映画『ザ・マジックアワー』を思い出して楽しくなりました。もう一つ、正さんが『真田小僧』の中でうっかり十銭を十両と言い間違えたのを、少しも慌てず直後の科白の中にくすぐりとして取り入れた咄嗟の機転も見事でした。

いつもながら武闘派の皆さんの研鑽ぶりにはただただ敬服するしかありません。無料でこれだけ質の 高い噺をたくさん聴ける機会はそうザラにはないでしょう。鎌倉淡青会の皆さんも来年はもっと多数の 方に参加いただけるよう期待しています。

| 牛旗工 | 妾馬 | 真田小僧 | 三井の大里 | 船弁慶 | 蜘蛛驾籠 | 午後三時頃 | 短命 | 死神 | 粗忽長屋 | 殺し屋 | 芝基 | はやぶさの む | しっくす | 崇德院 | 錦の袈裟 | 及対俥 | 演 音 月 |
|----------|------------|--------------|-------|------|---------|-------|-------|---------------|-----------------|-----|------|----------|------|-------------|------|---------------|-------------|
| 牛後五時終演予定 | 風呂家さん助(藤井) | 宫亭 | バルク亭 | 和朗亭 | 晴れる家 きり | 一時頃 | 相亭 | 何 亭 | 春風家 | 南家 | 於家 | 時頃 乱亭 | 東中亭 | 信 加 亭 | 爱子亭 | 駒 亭 | -一時用演 |
| 定 | 3 | 大 | 源 | 南 | 31) | | 不 | 骨 | 目 | 神 | 馬 | 馬 | どテ珍 | 艷 | 朝 | 忘 | |
| | 助 | 奥 (正) | 内 | 坊 | すと | | 撰 | 太 | 留変 | 前 | 垂 | 明日 | 珍 | 偽 | 大 | 舞 | |
| | 藤井 | 正 | (平賀) | (首藤) | (駒形) | | 探(天塚) | 太 (加藤) | 日留支 (萩原) | 能美 | (佐藤) | 馬明日 (佐野) | 荒瀬 | (鞠子) | (家富) | (渡辺) | |

第28回「咄の会」 一落語一

日 時:2016年10月7日(金) 14:30~16:30

場 所:山ノ内公会堂

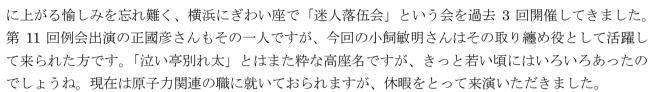
出演者:小飼敏明(泣い亭別れ太 東大落語会)

演 目:『厩火事』、『転宅』

参加者:27名(うち女性8名)+小飼夫人

懇談会:開催中止

昭和 52 年±1 年に東大を卒業した落研 OB の 7 名が、高座



柳家喬太郎でお馴染みの「まかしょ」の出囃子に乗って高座に上がり、一席目は古典の名作『厩火事』です。主人公のお崎さんは腕利きの髪結い。7歳年下で骨董品集めが趣味という亭主に惚れているものの、年下の亭主が自分をどう思っているのか心配です。思い余って仲人の旦那に相談すると、旦那は麹町のさる殿様と唐土(もろこし)の孔子の例を引いて、本心を試すある策を授けます。江戸時代は寄席が笑いのうちに教養を身に着ける場であったという好例の一つですが、その際の二人の頓珍漢なやりとりが滅法面白いですね。教わったとおり亭主秘蔵の茶碗をわざと割ってしまうお崎さんですが、亭主の「怪我はなかったか」という咄嗟の一言に感極まって泣き伏します。ああ良かったと聴衆も安心した瞬間、亭主の「怪我されては、遊んでいて酒が飲めねぇ」の一言でいかにも落語らしい"途端落"となります。とても優れたサゲですが、単なるぐうたら亭主ではなく、本心ではお崎さんに惚れているけれど、照れ隠しの気持ちもあって敢えて自堕落な表現にしたのだと解釈したいものですね。小飼さんはそうした夫婦間の微妙な心理を見事に表現し、質の高い話芸をたっぷり楽しませていただきました。

中入り後は『転宅』。さる妾宅に入り込んだ泥棒、妾のお菊さんの咄嗟の機転でうまく丸め込まれ、持っていたお金まで巻き上げられてしまいます。このあたりは『夏泥』の人の好い泥棒と好一対です。翌朝訪ねてみるとお菊さんは既に引っ越してもぬけの殻。近くの煙草屋で訊くと、昨夜の泥棒の一件を面白おかしく語ってくれます。ここは『なめる』と似ていますね。小飼さんの口調や仕草がまた見事なものでした。それを聞いている本人の心中を想うとおかしくてたまりません。中でもお菊さんに二階に用心棒がいると脅されて慌てて逃げ出したものの、実はこの家は平屋だったと知って唖然とするところは何度聴いても笑いが込み上げます。小飼さんは女が以前は義太夫語りだったという通常の形でサゲましたが、転宅と洗濯の掛詞を使ったサゲもあります。原話は天明8年(1703年)に遡るそうですが、江戸というより明治の匂いのする噺といえます。



二席目を終わった後のトークタイムでは、小飼さんが高校時代からすでに落研に入っていたこと、通勤電車の中で声を出さずに落語を繰りながら覚えたこと、「迷人落伍会」の前に皆で合宿して互いに批評しながら腕を磨くこと、その他いろいろお話しいただき、最後にはご一緒された奥様にも聴衆が拍手を捧げて楽しいひと時を終えました。

なお来年9月23日(日)に横浜にぎわい座で第4回「迷人落伍会」が開催されるとのことです。どうぞお楽しみに。

第27回「咄の会」 一落語—

日 時:2016年8月5日(金) 14:30~16:30

場 所:山ノ内公会堂

出演者:桂 宮治(落語芸術協会二ツ目)

演 目:『お化け長屋』(上・下)、『お見立て』

参加者:40名(うち女性5名)

懇談会:「鈴や」(宮治さんを含めて10名参加)



最高33度という猛暑でしたが、通算5回目のタイ記録とな

る 41 名の落語愛好家が集まりました。桂宮治さんは今大変人気の高い若手噺家で、「とにかくお客様に 笑っていただけるように」をモットーに、いつも明るく賑やかな高座で客を沸かせます。

「第一印象は"やりにくい"の一言ですが……」とまず笑わせ、次に写真を撮ろうとする世話人を見て振ったまくらが秀逸でした。「ある警察署の会で落語を演じたとき、写真のプロという警察官がその高座姿を撮影してくれたのだが、満足できる写真が一枚もない。実はその警察官は鑑識の専門家で、確かに写真の腕前はプロに違いないが、生きて動いている人間を撮ったのは久々だった……」文字で書けばさほどでもないのですが、宮治さんが語るとそれが無暗に面白くなるのです。

そうして観客の心を掴み、『お化け長屋』に入りました。長屋の店子たちはせっかく物置代わりに利用している空き部屋に借り手がついては困る。そこで問い合わせに来る借り手を、その部屋には泥棒に殺された後家さんの幽霊が出るという話で怖がらせて追い払おうとします。最初の一人はその怪談が功を奏して、怖さのあまり財布を落として逃げ出します。次に来たのはやけに威勢の良い男。店賃がタダなら幽霊が出たって構わない、早速引っ越してくるぞと飛び出します。しかも最初の男が置いていった財布まで持っていってしまった。たいていはここまでで終わるのですが、今回は 50 分近い大熱演で後半まで続けて演じてもらいました。早速引っ越してきたその男が湯から戻ってくると、店子たちが失敗しながらも何とか怪談どおりの様子を再現するので、先ほどの大言壮語はどこへやら、震え上がって逃げ出してしまいます。翌朝何も知らない大家が現れ、昨夜幽霊がわりに梁に吊り下げたお婆さんがまだそのままだったのを見て驚くというサゲ。実はこの後半部分は演者によって筋書もサゲも大きく違います。志ん生、圓生、談志などそれぞれに噺の運びが違いますのでぜひ聴き比べてみてください。

二席目は『お見立て』、廓噺の名作の一つです。しつこく通ってくる田舎のお大尽の顔を見るのもいやだという花魁、病気だと偽って会わずに帰そうとするが埒が明かず、お大尽に恋煩いして死んだことにしてしまいます。お大尽はそれじゃ墓へ参ると言い出し、廓の若い衆が適当に見繕った墓の前で涙ながらに掻き口説くのですが、よく見れば男性の墓。慌てて場所を変えると今度は子供の墓やら軍人の墓やら。業を煮やしたお大尽に、若い衆は「ずらりと並んでいますので、お好きなのをお見立て願います」



一これは張見世の女郎を自由に品定めして好きな妓を 選んでくださいという意味で若い衆が使う常套句です。 一途に花魁に惚れ込んだ田舎者、我儘言い放題の売れっ 子花魁、その間に入って右往左往する妓夫、三者の織り 成す喜劇を、宮治さんは独特のスラプスティックを交え ながら見事に演じてくれました。

懇談会は総勢 10 名、久し振りに訪れた「鈴や」で、 宮治さんの巧みな話術を楽しみながら、やっと涼しさが 戻る頃まで語り合いました。

番外編(14) 寄席巡り - その8

日 時:2016年7月4日(月)12:15~16:30

場 所:鈴本演芸場(上野)

出演者:三遊亭歌武蔵(トリ)ほか

参加者:14名

懇談会:「YEBISU BAR 上野の森さくらテラス店」

(参加者9名)

寄席巡りもいよいよ振り出しに戻って第2ラウンド。今回 (鈴本演芸場のホームページより転載) は上野の鈴本演芸場、2012年9月に10名で訪れて以来ほぼ4年ぶりです。月曜日の日中というのに7割以上の入りだったでしょうか。週日の昼席では「つばなれ」(客が10人以上になること)すれば大喜びという時代もあったことを想えば、まさに隔世の感があります。

前座の柳家寿伴(じゅばん)の開口一番は、お馴染みの泥棒噺『出来心』の前半。いささかたどたどしさを感じさせる高座ですが、去年 10 月に入門したばかりとあっては無理からぬことでしょう。プログラムの最初は、二ツ目の三遊亭歌扇。圓歌直弟子の最若手ですが、『鴻池の犬』を無難にまとめました。続いて奇術のダーク広和が登場、いつもながらの品の良い芸を見せてくれました。次は柳亭左龍の『初天神』。易しいようでいて良い味わいを出すのは結構難しい噺です。続く三遊亭歌之助は毎度お馴染みギャグ連発の漫談。続いて気分転換に漫才のロケット団が達者な芸で笑わせてくれます。

次に登場したのが三遊亭金馬。米寿にあと少しという高齢にもかかわらず、きちんと『紙入れ』を演じてくれました。筆者の世代では、金馬といえばつい三代目を思い浮かべますが、四代目を襲名してもう半世紀近くになります。次は入船亭扇好で『のっぺらぼう』。高校の英語の時間に習ったラフカディオ・ハーンの"MUJINA"を思い出させてくれました。三遊亭小円歌が貫禄たっぷりの三味線漫談で会場を和ませた後、当代三遊亭歌奴が『鼓が滝』でつなぎ、いよいよ中トリに落語協会最高顧問という大層な肩書を持つ三遊亭圓歌が登場。いまだに歌奴と呼ばれ「山のあな」を演れと声がかかるといわれていますが、戦後の落語ブームを支えた『授業中』や『浪曲社長』の印象が今も根強く残っているのでしょう。最近きまって演じる『中沢家の人々』はほんの少し顔を覗かせた程度で、あとはとりとめない漫談に終始しました。死にまつわる話題が多かったのがちょっと気になりました。

仲入り後の最初は漫才のホームラン。続いて江戸言葉の名手春風亭一朝が『雑排』を演じ、春風亭柳昇などとは少し違って「りん廻し」でサゲました。続いて柳家喬之助の『三人無筆』。これもサゲが少し違った形でした。"膝替わり"(トリのすぐ前)は紙切りの林家正楽。そしていよいよトリの三遊亭歌武蔵が「勧進帳」の出囃子に乗って登場。相撲取りだったのは中学卒業後のほんの半年なのに、それから 30 年以上経った今もいかにもそれらしい風貌と語り口を残し、それをトレードマークにしているユ



ニークさが売りです。そのキャラを生かした『支 度部屋外伝』から入り、最後にちょっとだけ『関 取千両幟』(『稲川』)を演じてハネました。大ネタ を聴いたという充実感は無かったものの、歌武蔵 ならではという独自の興趣溢れる高座でした。

終演後は有志 9 人が上野駅近くの「ヱビスバー」で軽く一杯。お店の勘定間違いでお釣りをたくさん貰うという前代未聞の珍事もあって、ハッピーエンドの一日でした。

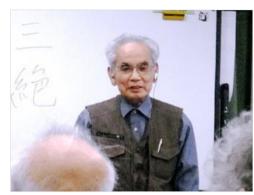
第26回「咄の会」 ―講演―

日 時:2016年6月3日(金) 14:30~16:30

場 所:山ノ内公会堂

講 師:山本 進(芸能史研究家 鎌倉淡青会会員)

演 題:「昭和の名人たち」 参加者:38名(うち女性7名) 懇談会:「侘助」(参加者5名)



一年ぶりに山本さんの講演を聴きました。昭和三十年代をピークとする昭和落語全盛期に活躍した名人、八代目桂文楽、五代目古今亭志ん生、六代目三遊亭圓生を取り上げ、山本さんの解説を聴きながらその名演をビデオで鑑賞しようという趣向です。ほかにも柳好、金馬、三木助など聴きたい噺家は数多くいますが、まずは上に掲げた「三絶」に指を屈します。



最初は文楽。持ちネタは三十ほどと極端に少ないものの、『明鳥』『船徳』『寝床』『素人鰻』『富久』『夢の酒』……、どれをとっても細部まで磨き抜き、練り上げられた逸品ばかりです。その中で今回山本さんが選んだのは『愛宕山』。裕福な旦那が芸者や幇間を引き連れて春の遊山を楽しむ長閑な風景、幇間の一八が欲に目が眩み谷底に飛び降りようとする時の逡巡、小判は拾い集めたが上に戻れないと知った驚愕、そして優れた「拍子落」のサゲが冴えます。渾身の力を込めて竹を曲げるシーンが圧巻ですが、これは大変に体力を使う仕草です。昭和45年の「落語研究会」

で医者の制止を振り切って演じた後、楽屋で倒れ込み暫く起き上がれなかったという逸話もあります。

次は志ん生。文楽とは対照的な天衣無縫の芸で知られ、"ぞろっぺい"さが看板のようですが、常に稽古を欠かさない芸熱心な面も知られています。文楽や圓生と違って今に残る映像が少なく、ここで紹介された『風呂敷』のほか、『巌流島』『おかめ団子』『鰍沢』、映画の中の『替り目』(短縮版)など僅か数編がその至芸を伝えています。『風呂敷』では間男を亭主に見つからぬよう逃がしてやる兄さんの手つき、目つきも見どころですが、兄さんが口にする「シャツの三つめのボタン」「百万年前のトカゲ」「上げ潮のゴミ」などといった警句に、志ん生の真骨頂



が窺えます。こうした当意即妙の巧みな言い回しは、文楽、圓生を遥かに凌ぐと言ってもいいでしょう。



最後に圓生。山本さんは『圓生四部作』や『圓生全集』などに関わり、圓生とは長く深い交誼を保って来られました。その山本さんが圓生の数多い持ちネタの中から是非にと選んだのは、カラー映像の『文七元結』。圓朝が中国の話を元に創作したという人情噺屈指の名作です。娘が吉原に身を沈めて得た五十両を、身投げしようとする文七に与える際の長兵衛の心中の葛藤を見事に描き、続いて壮絶な夫婦喧嘩から大店の主人の粋な計らいによる大団円に至るまで息もつかせません。新宿末廣亭の"大旦那"北村銀太郎をして、三代目小さんを凌ぐとまで言わせしめた圓生

ならではの名演でした。本当は圓生にまつわるいろんな話をもっともっと伺いたかったのですが、名人 芸のビデオ鑑賞にたっぷり時間をかけたため、残念ながら別の機会に譲らざるを得なくなりました。

懇談会は5名と小人数ながら、久しぶりの「侘助」で軽く一杯傾けつつ四方山話に興じました。

第25回「咄の会」 一落語一

日 時:2016年4月1日(金) 14:30~16:30

場 所:山ノ内公会堂

出演者:柳家喜多八(落語協会真打)

演 目:『かわいや』『うどん屋』『傘の化け物』

参加者:37名(うち女性7名)

懇談会:都合により中止

開設四周年記念として、「柳の宮喜多八殿下」こと柳家喜多

八師匠をお招きしました。一昨年第 15 回「咄の会」に出演した柳家ろべえさんの師匠です。通算 48 名の申込があったのに、途中でご自身やご家族の病気などが重なり、当日は 37 名の参加に留まりました。 ろべえさんの時も全く同様な経緯があり、師弟というのはここまで似るものかと驚きました。

師匠の登場の前に、山本進さんから喜多八師匠と一緒に栄光学園で講座を持たれていた頃のお話や、 師匠の人となりなどをご紹介いただきました。実は喜多八師匠は暫く前から体調を崩しておられ、この 日も高座への上がり降りにかなり苦労されましたが、一旦噺を始めてしまえば、そんなことはすっかり 忘れさせてしまう熱演で、仲入りを挟んでたっぷり三席話していただき聴衆は大満足でした。

最初は『かわいや』(『竹の子』ともいう)。ある武家の家の庭に生えた竹の子は、隣家の竹の根が伸びてきたもの。中間を隣家に行かせ、「他人の家に土足で上がりこんできたので手討ちにした」と告げさせる。相手は一枚上手で「手討ちは仕方ないが、せめて亡骸を渡されたい」という。こちらもさるもの「亡骸はすでに腹中に葬った。せめて形見にお召し物だけでも」と筍の皮を届けさせる。それを見て隣家の主人が「ああ、かわいやかわいや 皮嫌や」というのがサゲ。この噺、実は第7回で春風亭昇吉さんが演じました。聴いていて実に良く似た語り口だなと思ったのですが、それもそのはず、この噺は喜多八師匠が昇吉さんに教えたものだそうです。師匠は話した後でネタ帳にあったことに気付いた由。

そのまま続けての二席目は『うどん屋』。大師匠の人間国宝五代目小さんが得意とした噺です。よく知られた噺ですから内容は省略しますが、柳家の伝統を継ぐしっかりした芸を楽しみました。



仲入り後、観客との質疑応答から始まったのには吃驚。噺家になったきっかけは?という問いに対して「就職に失敗したから」の一言に満場大爆笑。あれこれやりとりの後、「本当は『明鳥』でもやろうと思ったのですが」といって語り始めたのが珍品『傘の化け物』(別名『落武者』ほか)。山中で道に迷った武士が一軒のあばら家を見つけ、一夜の宿を頼む。「女一人の侘び住まい故、殿御をお泊めするわけには参りませぬ」と断られるが、頼み込んで何とか泊めてもらえた。見れば実に色っぽい女、思わず袖を引く

と、手厳しく撥ねつけはするが女も何か誘うような風情を見せる。二三度同じことを繰り返すうちに投げ飛ばされて気を失う。やっと目が覚めてみれば、家も何もない野原の中に破れ傘が一本。「傘の化け物か、道理でさせそうでさせなかった」という際どいサゲになる。幸い観客は全員十八歳以上でした!恒例の懇談会は、大のお酒好きである師匠が禁酒中で参加されないことに加え、もともと参加予定者が少なかったこともあって、「咄の会」開闢以来初めてですが、開催を取り止めました。

追記: 柳家喜多八師匠はこの会の一ヶ月半後、5月17日にがんのため逝去されました。享年66。 死の直前にも関わらず優れた芸を見せていただいた師匠に心から感謝し、謹んでご冥福を祈ります。